

戦場と聖地——イスラエルを歩きながら

久保田 展 弘

旅のはじまり

はじめてイスラエルの大地を踏んだのは、一九九四年の秋でした。

アジアの聖地を中心とした私のフィールド・ワークは、西アジアのイスラエルが手つかずの空白地帯としてこのこっていたのです。

それまで東アジア、東南アジアから南アジア各地をめぐる、数えきれないほど多くの神や仏の名と、その造形に出会ってきましたが、偶像崇拜を厳しく否定してきたユダヤ教の実態が、そ

の対比の中で気になっていたのです。

エジプトのカイロからスエズ運河をわたり、シナイ半島をめぐるながら、シナイ山の麓にとどまって、四千年におよぶ聖山に毎日早暁に登るのが、旅のはじまりでした。

この年の秋、エジプトとイスラエルを結ぶタバ・ボーダー（検問所）を通り、イスラエルのエイラットに入った私の旅は、南の砂漠地帯から北のガリラヤ地方におよぶ、二十日間にわたる、ヒッチハイクに近いものでした。

バス路線網がイスラエル全土をカバーしてい

るといわれますが、各地に点在するパレスチナ自治区へは、バスの便はまったくなく、アラブ人の居住地で乗り合いタクシーを見つければ、バスの便も少ない北端のガリラヤ地方では、ヒッチハイク以外に移動する方法ありません。むしろ、タクシーをチャーターする手もあるので、イスラエル人のドライバーは、パレスチナ自治区へはまず行かないのです。

耳や目に入る報道の多くが、イスラム教徒のパレスチナ人と対峙し、ユダヤ教の原理を主張するイスラエル人というイメージが強かったために、私にはイスラエルへの漠然とした警戒心のようなものがありました。

それに、旧約聖書の最初の五章「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」をふくむユダヤ教の根本聖典『トーラー』には、インド文化圏から東南アジア、東アジアにおよんで各地の宗教がもつような霊魂観もなく、木や

水を神聖視し、風月に親しむような観念もまったくなかったからです。

イスラエルには、ユダヤ教以外を排除しようとする人ばかりがいるのではないか。こんな懸念は、その後の三度の旅の中ですっかり打ちつけたものになりました。

旅先での人々との出会い、そして多くの方たちの有形無形の援助がなければ、私のフィールド・ワークなど、ほとんど不可能だったにちがいありません。そしてイスラエルとパレスチナとの対峙が、いかに熾烈なものかを実感したのも、旅を通しての私の実感でした。

レバノンとシリアに国境を接する北端の地をめぐっていた早春の三月。私は道路に乗り出して三回も四回も手を上げ、止まってくれる車を三十分も四十分も待ち、ヒッチハイクをくりかえしながら、バニアスへ辿り着きました。

一年のうち三分の二くらいは雪をかぶった頂

が見えるヘルモン山（二八―四三）が、イスラエル、シリア、レバノン三国にまたがり、聳えたつて見えます。

エジプトからイスラエル全土におよんで、ほとんど同じような乾燥した岩砂漠がうねる大地を歩いてきた者にとつて、雪をいたたく山はいかにも新鮮で、神神しくさえ見えます。

イエス・キリストが、十字架刑に処せられるまでの二年くらいのあいだ、少数の弟子を引きつれ、伝道の日々をおくつたガリラヤ地方。旧約聖書に「キンネレテの海」の名で登場するガリラヤ湖の東には、ゴラン高原が広がっていますが、このあたりは一九七三年の第四次中東戦争までの長いあいだ、戦場でした。

イスラエルとシリアのあいだで、「ゴラン高原兵力分離協定」が調印されたのは、翌一九七四年の五月のことでした。さらに、それまで占領していたシナイ半島から、イスラエル軍が最終

的に撤退したのは、それから八年ものちの一九八二年のことです。

しかしイスラエルがいまも敵対するシリア、レバノンとの戦争が終結したかに見えたこのころから、イスラエル各地にあるウエスト・バンクと呼ばれる、パレスチナ自治区のうちでもっとも大きなガザ地区でインティファダがはじまったのです。銃で武装したイスラエル軍にたいし、パレスチナ人による、石を投げての抵抗が、以来こんにちまでおよんで二十年近くもつづいていることになりました。

ヘルモン山を間近にしたバニヤスは、国定公園の中にありますが、この地は紀元前二〇〇年に、ローマ皇帝からヘロデ大王に与えられたもので、ヘロデが皇帝をたたえるために牧羊神パンを祀る大理石の神殿をつくり、さらにゼウスや皇帝を祀る神殿を築いた聖地でした。

一方が台地にへだてられ、いまでは荒れた遺

跡だけしかないそこに、なぜ二千年も前、ギリシアからローマ文化へと伝えられた神々を祀る、壮大な神殿群が造営されたのだろう。そう思いながら、ほとんど礎石しかのこっていない遺跡に立ったとき、私はそれまでのイスラエルの旅では体験することがなかった、水の湧きでる懐しい音を耳にしたのです。

ヘルモン山から伏流する地下水が、台地の下に位置するバニアスで豊かな湧水となっていたのです。バニアスは水の聖地でした。この湧水が、イスラエルの生命線ともいえるヨルダン川の水源になっています。敵対する三国にとつて、いまも昔も水源地であることに変わりはない聖山ヘルモン。

なぜ戦争が肯定されるのか

ゴラン高原という戦場につづく水の湧く聖地。イエス・キリスト伝道の北端の地でもあるバニ

アスはいま、ユダヤ教徒にとつても憧れの湧水地でした。

かつてガリラヤ地方と、シリアのダマスコとを結ぶ交易路上の宿場町でもあったバニアス。園芸植物の原種が多いといわれるイスラエルですが、バニアスの湧水がつくる二キロ余の流れに沿ってイトスギの木立がつづき、水辺にはシクラメンの群生地も見られます。しかし流れを離れ、国境につづくそこには、いまも「地雷注意」の標識が立っているのです。

冬のあいだ、わずかに降る雨を吸いこんだ三月のガリラヤ地方の丘には、真っ赤な大輪のアネモネが一面に咲きそろいます。

一九四八年から一九七三年までの中東戦争のさ中、ゴラン高原につづく上部ガリラヤが戦場であったことなぞ、丘一面をおおう花群を前にどうして想像できるでしょうか。

ユダヤ教、キリスト教、イスラーム三教の聖



地であるシナイ山で、毎日ご来光を仰いでいたときもそうでした。「聖地が戦場になっている」この実感は、同じく三つの唯一神教の聖地とされるエルサレムの神殿の丘に立ったときにもありました。

そしていま、世界中が九月十一日の同時多発テロ事件を機に、大きくゆれ動いています。

事件直後の、アメリカのブッシュ大統領による「これは世界への挑戦である。戦争だ」という声明以来、アメリカ、イギリス軍によるアフガニスタンへの爆撃は、多くのアメリカ人が強調してやまない報復戦争の名のもとに、その実態も明らかにされないくらい多数の民間人の犠牲者をだしています。

どんな理由があろうと、テロ行為を肯定することはできません。しかしここでは、人間の死についての報道が、明らかに偏っています。国家の名のもとに行われた大量殺戮は、この近年

だけでもチェチェンに、アフリカに、レバノンに、南米に、バルカン半島におこっているのです。

シナイ山において、神からモーセに授けられた十戒は、旧約聖書「出エジプト記」に明らかですが、ここには「殺してはならない」という戒めがあり、叛く者にたいして報復する神であると記されています。そして十戒を授かった直後、イスラエルの民が、禁じられていた偶像をつくり、礼拝したことから、モーセは神の名のもとに人々に命じ、三千人を殺しているのです。なぜ「殺してはならない」という戒めが、偶像崇拜をした人々への殺戮につながるのだろうか。この疑問は、旧約聖書をはじめ読んでとくに生れたものです。

シナイ半島からイスラエル北端におよぶ旅の間にもこの疑問はつねにあり、私は旧約聖書を重視する聖域者に素朴な疑問を投げかけました。

そこに浮かび上がってきたのは、三千人を殺戮したときのモーセは Government (政府) であったという見解です。つまり神の教えに反した者への、政府としての審判 (Judgment) が、大量殺戮であったというわけです。

少し言いかえてみましょう。偶像崇拜という民の破戒にたいして、もう一方の「殺してはならない」という戒めは、神の名のもとにある政府、つまり国家の防衛にとっては、まったく意味を為さないとのことなのです。

しかもこの背後には、紀元前十八世紀のバビロン王朝によって成文化された「ハンムラビ法典」がもつ復讐法思想が脈打っているのです。

あらためてブッシュ大統領の声明をたどると、報復という名の爆撃、殺戮は、神の名のもとに宣誓されたアメリカ政府、国家にとってなんの矛盾もないことだったのだということが、

三千年余の時空を超えてうなづけるのです。

ここに、釈尊の言説をまとめた『スッタニパータ』にある「生きものを殺してはならぬ。また他人をして殺させてはならぬ」(中村元訳、以下同)を対置することはけっして無駄なことではないでしょう。

この言葉は前段に「かれらもわたくしと同様であり、わたくしもかれらと同様である」とありますように、生命の平等観から生れています。『法句経』にある「すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身おのにひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ」も同じ生命観にたっています。

大乘仏教はこの生命観を、すべての生きものにたいする慈しみへと広げ、日本仏教は草木成仏の思想を深めてきました。

自然崇拜に根ざした日本古来の宗教に、仏教が融合し、意味を与えてきた日本の宗教史をた

どるとき、そこに生命論、人間学としての日本思想の独自性が流れていることに気づきます。

昨年の十月のはじめ、スイスのエラノス会議に招かれ“*When Life Meets Life*”（「生命が生命に出会うとき」と題して講演した私の趣旨もここにありました。

シナイ山を辿り、イスラエル北端の地を歩きながら、神が、あるいは宗教が国家を体現するときの恐ろしさを思わないではいられませんでした。

神を超越的な高みにおくか、仏教がそうであるように、ひとりひとりの人間の内に仏を見るか。これは、これからの国際社会に問われていることです。仏教が国家ではなく、人間個の生きようを問いつづけることにはじまっていることを、私は現代の問題として考えたいのです。

すでにインド以来、仏教は善悪や美醜、大小、強弱といった、世界を二元対立の構造において

とらえる価値観を否定してきました。

この数年、とくに話題が多いグローバル・スタンダード（世界標準）という認識が、もし特定の価値をかけた、物量的な繁栄だけを求める、人間中心の価値観を良しとするなら、私たちは、神の名のもとに言われる、世界そのものの崩壊へと向かってゆくことにならないでしょうか。

くぼたのぶひろ 久保田展弘 一九四一年東京都生まれ。早稲

田大学卒業。専門は比較宗教学・文化論。著

書に『日本宗教とは何か』『インド聖地巡礼』

『神の名は神』『聖書はどこから来たか』『日本多神教の風土』『狂と遊に生きる〜一休・良寛』など多数。日本宗教学会会員、比較思想学会会員、アジア宗教・文化研究所代表。